

子育てにもっと夢が持てるまちを目指して—



愛情

第三章 子育てに必要な

多くの町民の思いが形になり、大津町は「子育てに夢が持てるまち」になりました。それはこれからも変わりませんが、まだ子育てに関する問題は全て解決していません。これからもさらなる子育て支援が必要ですし、家族で子育てを考えていかなければなりません。

「楽しい」と「楽」という言葉は、同じ漢字を使いますが、意味は違います。「楽しい」ことは必ずしも「楽」ではないのです。

子育てには不安や負担があり、決して「楽」ではありません。でも、子育ては「楽しい」のです。今しかできない子育てを楽しんでほしいのです。

夢とは、今より先にあるものです。今日の苦労は、明日の幸せになります。振り返れば、昨日の苦労など気になりません。夢を持って子育てをしてください。そして子どもたちに夢を持たせてください。

子育てにとって一番大事なことは、親と子どもがきちんと向き合うことです。地域や学校、行政なども支援は行いますが、子育ては、親と子どもとの問題です。

第三章は、「子育てに夢がもっと持てるまち」を目指す大津町にある「愛情」を紹介して、自分たちにできることを考えてみましょう。

☆☆☆
Dream

夢のきっかけは、ささいなことから始まります。高見さん一家の夢のきっかけも本当にちょっとしたことでした。でも、夢は持ち続けていたら、きつかなうものです。それは、形を変えながら、引き継ぎ、受け継ぎながら—

春代さんが、民謡を始めたきっかけも小さなことでした。21歳のときに誘われた民謡教室。ちょっとした好奇心が、人生を大きく変えました。今では、町が誇る民謡の第一人者。数々の民謡大会で優勝し、全国にその名を広めています。

民謡の良さを春代さんはこう語ります。「民謡は、昔の人の生活が歌になっていったから、歌詞が生きている—それが民謡の魅力なんじゃないか」。

大会では、歌を聞いて涙する人もいます。しかし、それは民謡の心を聞いて涙するのであって、歌声で泣いているのではないと春代さんは言います。民謡の良し悪しは、その心の届け方によって決まるのでしょう。これからも春代さんは、民謡の心を、素晴らしさを、伝えていきたいと夢を語ります。

浩一さんが、太鼓と出会ったのは、二十代のときでした。地蔵祭りの踊りを盛り上げるために太鼓を習いに行くことになった浩一さん。凝り性の性格が太鼓にどっぷりハマっていきます。先生は、いまでも師匠と呼んでいる民謡太鼓の先生。春代さんと出会ったのも、春代さんが通う民謡教室に太鼓の手伝いに行ったことが縁でした。音楽が2人をつないだのです。

そして浩一さんは、春代さんと結婚後、大津太鼓を創設します。大津をもっと盛り上げたかった思いを「大津太鼓」という形で昇華させました。3人の子どもにも伝え、「童太鼓」として、町の子どもたちにも太鼓の指導を続けます。浩一さんは、子どもたちに指導することを止めないと話します。

「最初は人見知りだった子どもが人前で太鼓をたたくようになり、自信がついて成長していくのを見るとたまりませんよ」と笑います。

息子が太鼓の大会で優勝することも、浩一さんの夢がかなうことです。「息子には面と向かって言えませんが、とてもうれしいですよね」—。そこに

は、親子で夢を叶えていった喜びがありました。

大志さんは、今や全国でも有名な太鼓演奏者の一人です。昨年の世界大会優勝を始め、「富士山太鼓まつり一人打ちコンテスト」でも見事優勝を飾っています。

生まれたときから太鼓と民謡、音楽に囲まれていた大志さん。太鼓を、父が創った大津太鼓を嫌いになるはずがありませんでした。

両親には怒られてばかりだったと笑いながら話しますが、「大切なことも教えてくれた」と両親に感謝を忘れてはいません。

5月に長女が生まれ、今は稼業である「高見自動車」を継いで、太鼓の練習と指導に明け暮れています。

音楽という形でつながった高見さん一家。親は子に思いを託し、子はその愛情をまた自分の子に伝えます。夢は一人ではかなえるものではありません。自分の生きた証が、わが子に受け継がれていくのなら、それは自分の夢がかなっていることになるのかもしれない。

夢を育てる



高見春代さんが、「産経民謡大賞」壮年の部で優勝し、文部科学大臣賞を受賞しました。「富士山太鼓まつり一人打ちコンテスト」では、息子の太志さんが、最優秀賞を受賞しました。

親子で連日の最優秀賞は、高見さんにとって、町にとっても誇りです。

夢は、家族ができたことでさらに大きくなりました。親子で夢を追うことの素晴らしさを、高見さん一家に話を聞きました。

たかみ はるよ
高見春代さん

たかみ こういち
高見浩一さん

たかみ たいし
高見太志さん